

# 久留米の自然



久留米の自然 107号  
2010年1月1日

発掘中の福聚寺古墳群  
(久留米市教育委員会写真提供)



## 打越丘陵

山口 淳

御井町の西、打越の丘陵は、地域では「隈山（くまやま）」の方が通りが良く、視覚的に御井町（旧府中町）の西を限っている。南は高良川に接して崖となり、北は朝妻で終わっている。だらだらとした何の変哲も無い丘陵だが、歴史的には変化に富んでいる。まずは古くから地域の墓所としての役割があって、信愛女学院の前辺りでは中世の墓塔も確認されているし、打越古墳も調査されている。競輪場付近にはガンジメを発見した笠九郎兵衛の墓があり、黄檗宗の正源寺南等には幕末明治維新で活躍した水野正名・吉田博文らの神葬墓も珍しい。木村重任の墓塔は広瀬曲巷撰文であり、江戸末～明治にかけての郷土史では忘れてはならない人たちの墓が集中している。「忠霊塔」を中心とした新陸軍墓地は昭和17年の建設であり、「陸軍橋」「遥拝台」や「円形野外講堂」あるいは第1

次世界大戦時のドイツ兵捕虜の墓など、戦争遺跡も集中している。

北へ向えば陸軍工兵18大隊の跡は久留米大学御井学舎・野菜試験場の敷地となり、「爆弾三勇士」の記念塔は「耕心塔」となっている。切通しの北は久留米藩「朝妻焼」の釜跡が残り、福聚寺境内に連なる。平成16年には発掘調査が行われ、2基の古墳時代前期の方墳が発見された。高良山麓の祇園山古墳との関連で重要である。古賀幸雄先生も今は奥様とともに、この福聚寺の墓地に眠っておられる。

江戸時代以降、市街地に近い里山であったために、いわば時々の開発によって歴史的な遺産が重層的に残る結果となったのだろうが、今又、外環状バイパスがこの丘陵の一角を横切ろうとしている。



故 森田公造先生

### 森田公造名誉顧問を偲んで

会長 橋田 沙弓

森田公造先生が平成21年11月20日満86才で亡くられました。私と先生の最初の出会いはある例会の際、草野町の紅桃林(ことばやし)にまで足をのびしたことがありました。そのとき、先生のお宅から、偶然にも先生ご自身が出てこられて、ビックリしました。そのとき、先生の自宅の庭が周辺の環境と一体となっておりとても素晴らしいものでした。先生もそのことをたいへん嬉しそうに話しておられました。

1967年に発行された『KORASANA』に森田先生の「虫屋誕生期(1)」が掲載されています。そのなかで先生は、「わたしがこの道に首をつっこんだのも御多聞にもれず、学生時代の夏休みの課題にワタナベアゲハのすごい流紋型を採って、生物の先生に驚かされたことに出発する」と書かれています。

また、「当時台湾台北の師範学校の2年か3年で、自宅が植物園の近くだったので、そこで採りまくった。それからは理科部に入って方々を歩きまわった。そのうち、毎週日曜に山行きを欠かさなくなった。にぎり飯を腰に草山(そうざん)や北斗や烏来(うらい)などの採集地を歩きまわった。

シジミタテハを5~6頭も草山でとり、また、修学旅行で阿里山(ありさん)の森林鉄道のデッ

キから、高山蝶をとりまくったのも大収穫のひとつだった。

昭和14、15両年の夏休みは南支那福建省のあもい島に渡って採集をした。コモンタイマイやオナシクロアゲハやヒヒロシジミなどの熱帯の蝶を追いまわした。あもい島の蝶は初記録だから、是非発表するようにと、農事試験場の楚南仁博先生にすすめられて、台湾博物学会会報に40種を報告した。

学校も上級になるにつれ生物部の活動にも力を注いだ。部誌を発行したり、部会で発表会を計画したり、展覧会をやったり、大活躍だった。展覧会の入場者に美しい鱗粉転写のしおりを作って全員に贈ったり、当時台湾未記録だったウラベニヒョウモンモドキを発見して、農試に寄贈したりした。(台湾博物学会会報31巻211号1941)

(中略)

日本に引き揚げてきて蝶が少ないのに調子ぬけしてしまったこと。台湾では、一年中、いろいろなものが多量に入ったのを思うと、このあたりは本当に寂しい感じがする。終戦後の混乱が次第に落ち着くにつれて、やはり、自然の美しさ、昆虫の魅力がよみがえってきた。久留米昆虫同好会の存在を知って末席に加えてもらったのはいつの頃だったろうか。今では、蝶の外、いろいろな昆虫にも手を出している。もっともっと広く昆虫の世界を知りたいと思っている」とこの世界に入ったきっかけとその思いを書いておられます。

國分謙一副会長によると、コガネムシの仲間に森田先生の名前がつけられているとのこと。

#### Spinanomala moritai

1961年久留米昆虫同好会の10周年を記念して『KORASANA』が発行されたとき、1巻から16巻まで、全て先生が手書きでガリ切りまでされました。全国誌の雑誌紹介欄にその出来栄の良さに印刷屋に頼んだものであろうと勘違いしたとの記事があったとのこと。

停年まで勤められた田主丸養護学校の卒業生をはじめ、ご家族の方、多くの方から慕われました。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 久留米市の蝶 42

## ルリタテハ

国分 謙一

柏餅は、お正月にはふさわしくないと思います  
が成虫で越冬するので書いてみました。

幼虫が和菓子店やスーパー等で販売されている  
柏餅を包んでいる葉（筑後の方言ではガメンハ、  
業者内ではサンキライと言う）を食べる蝶がいま  
す。餅は周年販売していますのでお正月に家族が  
揃ったとき、お茶を飲みながらでも召上った時そ  
の葉を見てください、高良山や近くの雑木林には  
非常に多くある植物ですから、野外で見ても直ぐ  
に判ると思います

日本名は“ルリ色のタテハ”で表面に綺麗なル  
リ色帯があり美しい蝶ですが、裏面は一面の樹肌  
色で見栄えがしません、インドから東南アジアに  
かけて広く生息し、日本では八重山諸島から北海  
道までいます。地理的変異があり南へ行くほど青  
色帯が広がります。（国内でも亜種として八重山、  
沖縄、本土と三つに区分する事もあります。）

雄雌の区別は外見からは非常に難しく交尾器を  
調べるのが確実です。

## 庭に呼ぶ

生態はイギリス人の商人であったプライヤーが、  
1887（明治20）年から1888年に死んだ後も1889  
年までに3回に分けて出版された、日本の蝶で最  
初の原色図鑑に幼虫の食草として“菝葜”（サルト  
リイバラ、猿捕茨は正しくない）とあり、古くか  
ら知られていたことが判ります。野外での主な食  
草はサルトリイバラですが久留米市周辺では非常  
に多く幼虫を探すのは困難で、また棘があり危険  
です。他の食草としてホトトギスも良く、私の家  
の花壇にあるホトトギス（園芸品のため正確な名  
称は調べていません）にも時々、黒色で棘がある  
4cmほどの幼虫が発生しているのを見ることがで  
きます。

## 日本語を使った名前

ルリタテハの学名には、日本のものは地理的変  
異があるとして亜種名（地理的変異型）に日本語  
を使用した唯一の蝶です。1823（文政6）年に  
長崎の出島に来たシーボルトが1824年に発表し

たもので、後翅の裏面の白い模様が、カタカナの  
“ノ”のように見えることから名付けられました。  
日本の蝶で模様が英語のCやLと見えるものがあり  
シータテハ、エルタテハと言います。

当時、オランダ船はインドネシアのジャワ島か  
ら7月頃に来て2~3ヶ月ほど滞在し出港してい  
たから、発表月が判れば1823か1824年の採集品  
と判るはずですが。1823年であれば殆んど出島か  
らは外出できなかったと思いますので、出島で採集  
し一目見てジャワ島で採集していた物と直ぐに日  
本の物が違っているのに気付いたと思われます。  
シーボルトの研究は詳しくされているようですが、  
この部分の詳しい事柄は私には判りません。

なお、日本産を表す亜種名は中国大陸での境界  
がはっきりしないので、研究が進めば使用されな  
くなるかもしれません。

## 久留米市での観察

成虫で越冬し3月の下旬頃に汚損した個体が、  
日当りの良い南斜面で道路や崖で日向ぼっこをし  
ているのを良く見ます。飛んでいる時は黒く見え、  
この時期は他に黒く見える蝶はいませんから判り  
ます。新しい成虫は6月頃から出現し、10月末頃  
まで3回ほど発生して殆ど連続して見られます。

成虫は樹液によく来ていて、裏面が樹肌そつく  
りなので見つけるのが困難ですが、時々羽を開閉  
したときに鮮やかなルリ色の帯が見えるので判り  
ます。

各地のクヌギ林や柳の樹液に来ているので探さ  
れたら如何でしょうか。市街地では熟した果実を  
放置していると、来るのは他の昆虫も多いので  
すが時々来ることがあります。



ルリタテハ

**追記** 久留米の蝶の36（会誌97号）のダイミョ  
ウセセリで「関が原の戦い」として関西型と関東  
型の関係を述べましたが、米田豊氏より2009年3  
月に戴いた「白水陸著作集I」の101~104に「種  
以下のカテゴリーの区分」として白水博士が55  
年前に述べられていることが分かったので追記し  
ます。

## 郷土の樹木9

### アカマツ

#### 猪上 信義

アカマツは日当たりのよい丘陵地から山地に普通に見られる常緑性の針葉樹です。樹皮は若いときは赤褐色、後に暗褐色になり、亀甲状に割れます。葉は針形で長さ7~12cm、短枝は2針葉で束生します。花は4月下旬から5月上旬、その年に伸びた赤みを帯びた枝(冬芽)の先端に雌花が付き、基部に雄花が付きます。球果(松かさ)は卵球形で長さ3~5cm、翌年の10月に成熟し、中に細長い鱗片をつけた種子が多数入っています。日本では本州、四国、九州に分布し、朝鮮半島や中国東北部にも知られています。陽樹のため新しい土地や道路法面、岩山などによく生えます。

材は建築材(梁、桁、鴨居、根太、垂木、羽目板など)、器具材、土木材(坑木、枕木など)、薪炭材、パルプ材、マッチ軸木、木毛(材を細かく裂いて陶器、ガラスなどの製品を包むときに詰めるもの)などとして、私たちの生活には欠かせない木でした。また根に共生するマツタケは昔から食用として普通に利用されました。驚くべきことに1950年ごろの統計ではマツタケの生産がシイタケを上回っていました。さらに墨はマツの根を不完全燃焼させたときに出るスを集めてニカワで固めたものです。材や根からとれる松脂やテレピン油は石鹸、塗料、香料などの原料とされました。一度火がつくと小雨程度では消えにくい性質を利用して松明(タイマツ)としました。また新鮮な葉を砂糖水に付けてしばらく日向に置いたものは松葉サイダーとして飲用に供されました(私も子供の頃、祖母が作ったのを飲んだ記憶があります)。枝が根元から多数分かれて矮生する多行松(タギョウシヨウ)は、庭園樹に使われます。さらに外生菌根と共生して吸収作用を高めるため、栄養分の乏しい場所でも成長する特徴を活かして、海岸や土地のやせた場所での緑化に用いられます。

このように利用価値の高い木ですので、以前は

広く植栽もされ、自生をあわせて優れたマツ林が各地に見られました。しかし戦後にマツノザイセンチュウ(多分外国から移入されたもの)がマツノマダラカミキリによって運ばれ、カミキリムシがマツをかじることで樹体に入り、増殖して急速に木が枯れるという症状に見舞われて、事態は一変しました。しかも1955年頃から始まった燃料革命により、枯れたマツが薪として利用されずに放置されて、被害は蔓延して現在に至っています。また前述の様々な用途も生活様式の変化や代替品の登場で、ほとんど利用されなくなりました。

本県でもマツ林の衰退は著しく、英彦山周辺や八女郡(1980年ごろまでは黒木町の笠原には胸高直径が1m前後のアカマツ林がありました)、浮羽郡などで見られた群生地は姿を消し、ヒノキ人工林となったり放置されて広葉樹林に変わりました。現在かろうじて群生状態で見られるのは赤池町の皿山周辺や福岡市の油山周辺などごく限られていて、県の絶滅危惧植物群落到指定されているほどです。久留米市でもかつては耳納山地北麓、高良内、明星山、高良台などには広く見られたようですが、今では若い木が点在するだけで、白骨状態の木がその名残りを伝えている程度です。

よく似ているクロマツは葉が剛直でやや短いこと、冬芽が白味を帯びること、樹皮が古くなると黒褐色になること、主に海岸地方に自生又は植栽されていることなどの違いがあります。最も分かりやすいのは葉を手の甲に当ててもあまり痛くないのがアカマツで、痛みを感じるのがクロマツです。しかしこの両種は簡単に交雑して、中間的なアイノコマツと呼ばれるのがありますし、糸島地方ではかなり標高の高い地域でもクロマツが自生していますので、そう簡単にはいきません。

久留米市とマツの関係では、まず第一に三潞地方での盆栽や庭園松の生産があげられます。これは明治時代に久留米市寺町の住職阿理城(ホトリリジョウ)の考案といわれる、庭園にマツを使用する方法が三潞地方の造り酒屋の作庭技法として伝えられたことにより、この地に根付いたものです。

昔は近郊に自生するアカマツが利用されていましたが、今では葉の色が濃く樹勢のいいクロマツや盆栽に適するゴヨウマツが主に使われています。これらは日本庭園にはなくてはならないもので、地元では毎年4月はじめに「みずま黒松春まつり」が開かれています。ちなみに理城が手がけた庭園で代表的なものとしては、佐賀県神崎市にある国指定名勝の九年庵があります。

次には高良大社の「子の日の松神事」です。これは高良大社縁起書の『高良玉垂宮神秘書』に「御宣託以降上津荒木ノ青性山ノ松ヲ採リテ高良山ノ後ロノ山ニ植エラルルナリ」とあるのにちなんで、上津町の本山から高良大社へマツ苗を奉納し植栽する神事です。元は上津周辺に自生するアカマツが使用されたようですが、一時行事が途絶えました。そして近年復元された今では、福岡県森林林業技術センターが開発したマツクイムシに抵抗性のある「筑前スーパーくろまつ」が使われています。

また篠山町のケヤキ並木から篠山城跡にいたる道路脇と城内に数十本のクロマツが見られます。直径は30~50cmで、樹齢は80~100年前後だと思われまふ。以前はもっとたくさんあって並木状だったものが、マツクイムシなどにより枯れて現在に至っているのではないのでしょうか。その起源などについてご存知の方は教えてください。

最後に特に久留米市に限ったことではないのですが、マツと文化といえば門松のことに触れないわけには行きません。これは新年には年神様が常盤木(トキワギ=常緑樹)に舞い降りるとされることから、門口にマツやタブノキ、サカキなどの常緑樹を飾り立てたものが起源です。その後竹が加わり、常盤木の代表としてマツと組み合わせて現在のような形になったといわれています。この場合のマツも通常は緑色が濃く、勢いのあるクロマツが使われることが多いようです。一時期、松の枝を切って門松を作るのは自然破壊につながるという考えから、松飾りを廃止して印刷した札を

家の前に貼ることがはまりました。しかし元を正せば紙も木から出来ていますし、それを作るには多くの環境負荷がかかります。印刷用のインク(植物由来もありますが)も同様です。天然素材をそのまま利用する門松とどちらが地球に優しい行為なのか、まやかしのエコロジー運動が蔓延している昨今、考えさせられます。

### 生き物に魅せられて その45

#### ウッカブセの巻 松永 紀代子

2008年2月、三国で細々と続いてきた「ウッカブセ」のある「エバ」(猟場)の一つがその役目を終えた。

「ウッカブセ」とは、水を張り糶をまいたエバの一边に仕込んだ網が、鉄線を引くことでカモにかぶさることから呼ばれている仕掛けのことだ。片無双網猟と文献に記されているが、地元でこんな言葉を使う人はいない。今残されているエバは数箇所過ぎない。後継者問題など様々な理由があるろうが、警戒心の強いカモがつかる(入る)ひっそりとした環境が減ったこともこの猟の衰退の原因の一つだろう。今回のエバでは、隣接地の開発が始まろうとしていた。

ウッカブセのことを初めて知ったのは数年前のことだ。山懐の小さな池のそばでは、トンボが飛び交い里の花が咲き乱れていた。斜面の上には犬小屋のようなものがある。定期的に草刈がされ大切にされているようだ。いったい何のためだろう? 地元の年配の方から、猟銃を使わないカモ捕りが今も行われていることを聞いた。凍てつく寒さの中、小屋に潜んでカモが糶を食べ始めるのをじっと待ち、鉄線を引くという。

小郡といえばカモ。三国の人たちの冬の味覚でもあった。その料理屋さんもとうとう1軒になってしまった。人々に物質面では豊かで便利な生活をもたらしたこの地域の開発は、自然と共に寄り添ってきた三国の文化を風前の灯にしてしまった。

**善導寺の菩提樹2本****高山 美子**

福岡県指定天然記念物

所在地：久留米市善導寺町

飯田550番地

指 定：昭和39年5月7日

A：勅使門前（1号木）

B：鐘樓の南（2号木）

菩提樹は、寺院の庭などに植樹される中国原産のシナノキ科の落葉高木である。初夏のころに葉脈から1個の狭い舌形の葉軸の苞がでて、その中ほどから花軸の先端



A



B

にまず花が咲き、つぎにその下部からでた枝に花が咲く。これを繰り返してだんだん外側の花が咲いていく。淡黄色の5弁花が吊り下がる。果実はほぼ球形の小粒で灰褐色の毛が密生している。この粒から数珠玉がつくられる。善導寺の境内には4本あるが上記二本が県指定である。

**外来生物 アカミミガメ****河内 俊英**

アカミミガメ（赤耳亀）爬虫類カメ目ヌマガメ科アカミミガメ属のカメで、ミシシippiaアカミミガメ等の子どもはミドリガメとも呼ばれています。流れの緩やかな河川や池、沼などを棲みかにし、水生植物が繁茂した流れの緩やかな場所を好む。岩や石の上などで日光浴を行う事を好むことから良く見かけますが、冬季になると水中で冬眠します。

食性は草食性傾向の強い雑食であり、植物の葉、花、実、水草、魚類やカエル及びその幼生、昆虫、ミミズさらに動物の死骸なども食べます。幼体は動物食傾向が強いが、成長に伴い植物食傾向が強くなります。飼育時のエサとして参考になるのではないのでしょうか？



1930年前後にまずミドリガメとして輸入されたようですが極少数であり、戦後の1950年代半ばには本格的に輸入され、夜店に「ゼニガメ」として登場しペットとして全国に広がりました。

近年の問題としては、特に河川、池や沼の護岸がコンクリート化されカメの生息場所が縮小している中で競争が問題になっています。それは、ウシガエルやアメリカザリガニ、オオクチバスでも問題になっているように、外来種と在来種（日本にもともと生育する種）との生存競争（エサや生息場所などをめぐって）が激しくなっています。在来種のニホンイシガメやクサガメが絶滅に追いやられるケースも出ており、淡水産カメの世界でも保護の対策が必要になっています。

## 高良川流域のキノコ (その9)

角 正博

菌類において、1990年代以降、遺伝子の塩基配列を読み取って比較し、系統・類縁関係を推定することが盛んに行われるようになった結果、従来の表現形質に基づいて確立された分類体系が変更されてきていることは、すでに何度も述べましたが、前回のホコリタケ目と同様、従来のチャダイゴケ目、ケシボウズタケ目（日本ではコウボウフデ科、クチベニタケ科、ケシボウズタケ科で構成されていた。）は解体・消滅しました。チャダイゴケ属は、ハラタケ目となりました。クチベニタケ科はイグチ目、ケシボウズタケ属はハラタケ目に変更され、コウボウフデは担子菌類ではなく子囊菌類であることが明らかになりました。なお、チャダイゴケ属はかつて6月に高良台で、8月に筑後市西牟田の農道の路傍で採集したことがありますが、高良川流域では現在までのところ確認できていません。

18. クチベニタケ (口紅茸) *Calostoma japonicum*

高良川流域では、クチベニタケ科クチベニタケ属クチベニタケが見られます。子実体は淡いあめ色の頭部と軟骨質で根状の偽柄部とからなっています。頭部の表面はささくれていたり、点々と付着物がついていたりにしています。その頂部には、口縁部が鮮紅色に縁取られた星形の裂口があり、よく目立ちます。属名の「*Calostoma*」は「*calos* : 美しい + *stoma* : 口」でよく特徴を表しています。和名の由来も、頂孔が星形に裂け、縁が鮮紅色をしているので、ちょうど口紅をさしたようにみえることによります。種小名の「*japonicum*」は「日本の」の意味です。ホコリタケ類と同様に、胞子が熟した頃に頭部をつまんで押すと、頂部の裂口から煙のように胞子が勢いよく噴出します。根状であめ色の偽柄部は、多数の菌糸束からなっています。高良川流域では、10～11月に遊歩道や林道の路傍の切り通しに群生していることがあります。

次は、ニセシヨウロ目です。従来、日本ではツチグリ科、コツブタケ科、ニセシヨウロ科からなっていました。これらは昔イグチ目となり、ニセシヨウロ目も消滅しました。

19. ツチグリ (土栗) *Astraeus hygrometricus*  
ツチグリ科では、11月下旬～翌3月中旬頃に高良山の遊歩道や林道の路傍の崖で、ツチグリ属ツチグリをたまに見ることができます。子実体は無柄、幼菌は類球形、成熟すると星形の外皮が裂開します。星形の外皮は3層からなり、外層は革質、中層は膠質で吸水して膨張し、乾燥して収縮するそうです。内層は銀白色の薄膜層で亀甲状にひび割れ、やがて消失するので、古くなったものでは見られなくなります。星形の6～10片の外皮は乾燥すると内側に巻き込み、湿ると開くので「きのこの晴雨計」と呼ばれています。大気中の湿度の高低によって、外皮が開閉することで、内皮を刺激して頂孔より粉状の胞子塊を飛散させます。属名の「*Astraeus*」は「*aster* : 星」で星形の外皮、種小名の「*hygrometricus*」は「湿度計の」の意で、これもよく特徴を表しています。基部には黒色の短い根状菌糸束があります。



クチベニタケ (口紅茸)

## 訂正とお詫び

前号 (106号) 7ページ。キノコリスト48を下記の様に訂正しお詫びいたします。  
誤 ; チノマツタケ 正 ; ツノマツタケ

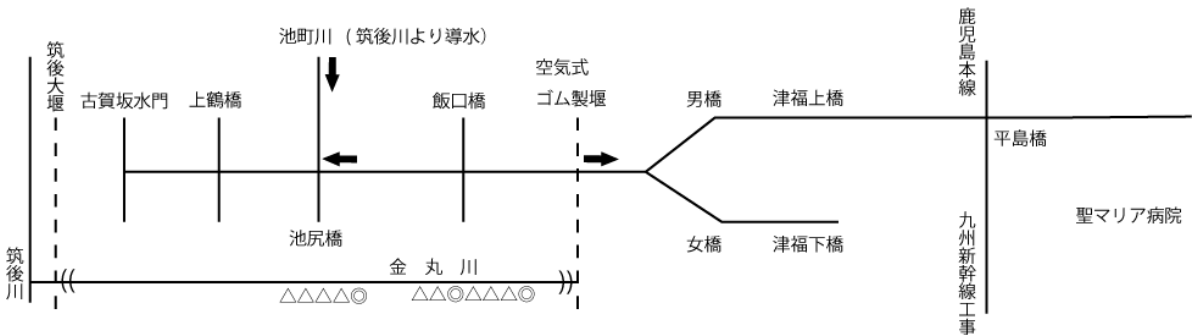
## 会員投稿

## 金丸川中流域の近況報告

筑後川水系金丸川生態研究者 野口 勝司

## 概要

金丸川は筑後大堰建設以来堤防の拡張、改修等が相続き、九州新幹線工事と相重なり現在進行中であるが聖マリア病院北側の工事が終われば金丸川中流域の水質環境も次第に安定してくるのではなかろうか。石組の仕組みも変われば後は不法廃棄物の皆無に務めねばなるまい。今後、水生生物、魚介類の環境の保護、水流の円滑を期待することができることになる。



(( )) 有明海の満潮時、金丸川の逆流の範囲

← → 大潮時特に汚濁しやすい範囲 (月2回の満潮時 筑後大堰建設後)

流失物が浮遊堆積しやすい流域 約300m

古賀坂水門 ————— ゴム製堰 (距離1000m程度) 勾配500分の1程度

◎ 昨年伐採樹木 (カワヤナギ、オニグルミなど) 県土木事務所 処置終了

△ 流水、景観著しく阻害カ所、撤去伐採が必要なカ所 (カワヤナギ、オニグルミ、ナンキンハゼ)

約十二カ所—八月中旬に伐採終了 流水、景観改善された。

## その他の参考事項

雨量過去6年間の月別統計表 (久留米市西部) 並びに図表など土木事務所に提供。

1月16日—金丸川への投棄自転車引き上げ依頼、引き上げ撤収終了。

## 処置に感謝

☆ 金丸川の河口は筑後大堰より120m余り下流に開く。

☆ 流量 金丸川 0.18ton/s 池町川 0.5ton/s (1⇔3 ton/s) 月の間

☆ 金丸川河口より500m上流の古賀坂水門付近 (右岸) に堤防崩壊のカ所 (古い石垣20m位) が一カ所ある。修理を要すると思われる。

☆ 九州新幹線工事 (1~2) 年前一時期濁りが激しく透視度5~8cmの頃があった。



## 生ゴミ堆肥

野中町 石橋 一也

はじめまして。今年、本会に入会しました、石橋一也と申します。私は昨年4月久留米に転居し、市内の私立高校で理科を教えています。

その私が今年の秋口から取り組んでいるのが「生ゴミ堆肥」です。以前からこの「生ゴミ堆肥」に興味がありましたが、この夏の福岡県環境教育学会での生ゴミ先生こと吉田俊道氏の講演をきっかけに実際にやってみようと思いついたのです。

そこで、生徒から有志を募り、9月の下旬から我が家の生ゴミと学校の食堂から出る生ゴミを利用して土づくりを始めました。

最初は悪臭を放っていた生ゴミですが、3、4日もすると臭いが和らぎ、表面には白カビが繁殖しました。そして定期的に土を攪拌してやると1ヶ月もすると完全に生ゴミは消え、熟成した土となりました。そこに大根植え、植えて育てています。

この生ゴミ堆肥をやろうと思った理由は、美味しく化学物質を使わない野菜を育て食べたい、ということと、我が家の生ゴミ処理に役買えないかという単純なものでした。

そんな折、さる11月に開かれた「持続可能なまちづくり」講演会に参加しました。

その中でゴミ処理の話があり、ドイツのフライブルグ市では家庭から出る生ゴミは、生ゴミだけ別に回収され、堆肥にしたり、その過程で発生するメタンガスが発電に使われたりしているとのことでした。つまり、生ゴミはリサイクルゴミとしての優等生だという話もありました。

現在日本では生ゴミは可燃ゴミとして処理されていますが、生ゴミの主成分は水です。その水を処理するために膨大なエネルギーを消費していることとなります。そして、久留米では、そのために焼却場を新たに建設しようとしていることなるのです。

そのような事実を知ると、生ゴミ処理はゴミ問題解決の重要なポイントだと感じます。

勿論、温暖化ガス削減に役立つことは言うまでも

ありません。

生徒達とやっている生ゴミ堆肥ですが、この講演会にも勇気付けられ、あまーい、あまーい大根になれ、おおきなおおきな大根になれ、と収穫を楽しみに育てています。

## 筑後川上流エコツアー

### 自然エネルギー利用の現場を訪ねる

安本 康時

鳩山首相の「日本は、温室効果ガスの排出量を2020年までに1990年比25%削減する」との国民に対する宣言、国連における国際公約発言を始め、地球温暖化防止の取組みが、日本はもとより世界中が注目している中、先日、筑後川流域連携倶楽部・筑後川まるごと博物館が主催した、標記のツアーに参加しましたので、行程順に、ご報告したいと思います。

\*日田市バイオマス資源化センター

日田市を中心に、一部久留米市など近隣の市町村から回収した、生ゴミ、豚ふん尿、農業集落排水汚泥を堆肥・液肥化し、日田市内の農家などに廉価で頒布している。更に、工程上発生する廃熱で発電し施設内の利用と余剰電力は売電している。

処理能力：1日80トン

発電能力：毎時340キロワット

敷地面積：15、452㎡

供用開始：平成18年4月

総事業費：9億5千万円

見学で敷地内を回っているときの、異臭には、多少、気になった。

\*日田市・小鹿田焼の里

小鹿田集落の人達は昔は農業や林業で生計を立てていた。近くの原生林、雑木の山には無尽蔵にある陶土、程よい傾斜の清流が流れる谷が多く、焼物に必要な土、薪、水があり、渡来した陶工もいて300年前から、全工程を手仕事で行う、世界的にも貴重な10軒の窯元の集落となった。薪と水は自然に手に入る。土は谷川の水を利用した

唐臼と木製水槽で陶土に加工している。

＊日田市・料亭久兵衛茶屋（昼食）

飯塚市の炭鉱王、伊藤伝右衛門の婦人・柳原白蓮や日田市出身の江戸後期の儒学者・広瀬淡窓ゆかりの料亭の由。

昼食時、私の正面に座ったのが、中国から来た久留米大学の留学生だった。いろいろと話をしていの中で突如、「日本は政権交代があつていいですね。わが国は60年間、中国共産党の一党支配が続いているが……」の発言には少々驚いた。

＊鏡山風力発電所（車中より説明あり）

民間の会社が経営している風力発電所であるが、九州電力は電力供給量に余力があるので、不足気味の東京電力へ売電しているそうである。

＊九重八丁原地熱発電所

わが国最大の地熱発電所で、昭和52年6月1号機、平成2年6月に2号機が完成し出力11万キロワット。九州では昭和42年8月に完成した、1万2,500キロワットの大岳発電所について2番目、全国では5番目に完成した。

ここで、日田市の電力需要の大半を賅っているそうである。

また、平成18年4月に、八町原バイナリー（蒸気、熱水を熱源で発電）発電所が営業運転を開始した。八町原地熱発電所の運転や計器の監視は、約2kmはなれた大岳発電所から行っているそうである。

「自然エネルギーマップおおいた」によれば、大分県は森林資源が豊富で、日照時間が長いことや豊富な水資源があり、また、温泉や地熱発電など全国でも有数な自然エネルギーに恵まれている。

地球温暖化の原因である温暖化ガス（メタンガスや二酸化炭素など）をほとんど出さない太陽光発電や風力発電、また、間伐材などの余剰材木を燃料として発電するバイオマス発電など、将来有望なエネルギー源として注目されているそうです。

その他、畜産廃棄物バイオマス発電、中小水力発

電、廃棄物固形燃料、バイオジーゼル燃料、食品廃棄物バイオマス発電・熱利用など全県下で自然エネルギーの活用が着々と進んでいるようです。

地球温暖化防止の取り組みで、福岡県では北九州市、大牟田市、三潞郡大木町が頭に浮かぶが、我が久留米市が、積極的に取り組んでいるとは思えないのですが、私の認識不足なのでしょうか。

(21年11月17日記)



ひととき 動物笑い話 その51  
ウナギとナマズ 米田 豊

ナマズが「来～る来～る 夏が来～る」と調子よく大きな口で唱っていると、ウナギが「その歌唱うのを、止めてくれないか」と言う。

「何故だい？ もうすぐ夏だし、おれ達は水中にいるから暑くはないぜ」と問い返すと、ウナギは言った。

「夏はおれ達にとって受難の季節なんだよ。江戸時代に平賀源内と言う有名な科学者が知人の鰻屋のために、ウナギは土用に限るなどとキャッチフレーズを作り、それが人々に受けてしまったから、それ以後夏に多く捕獲されてかば焼きにされるんだ。先日も友人が一人捕まってしまったよ。本当に来～る来～る 頭に来～るだよ。」

ナマズはウナギに同情し、申し訳なさそうに小さな目を更に小さくし、傍若無人に見える大きな口と長いひげも小さくしようとしたがそれは出来なかった。

「人間はかば焼きならぬぼやきを味わったらしいのに」とぼつり。

※最近、中国産の安い養殖ウナギが大量に入荷しているが、これはサルガッソー海域を産卵場所とする西洋ウナギで、我が国の天然ウナギとは種が異なり、ずんぐりむっくりしている。

## 例会報告

### 第371回例会 水辺の自然観察会

丸山 由紀子

7月20日(海の日) 高良川下流のくろめウスで、観察会を行いました。この観察会は夏の例会として回数を重ねており、高良川やその周辺の自然の移り変わりを、長年にわたって観察してきました。当会の幹事として、水生生物の専門家として、毎年熱心に指導を行ってこられた米田豊先生が郷里の金沢に戻られることになり、講師として今回が最後の参加ということになりました。目を輝かせて魚を追いかける子供たちにも、分かりやすいように話をしてくられた米田先生が、これから参加されないのはとても残念なことです。この日は、17人の参加があり、身近な高良川に生息している、普段はじっくり見る機会がない淡水魚の観察を行いました。



魚の観察の指導をする米田先生

### 第372回例会 筑後川観月会

古賀 信夫

9月26日(土) 当会の秋の恒例行事となっている観月会を行いました。当日は天気もよく子どもから大人まで50人の方々に参加していただきました。特にこの日は木星がとてもよく観察できるということで、指導をいただいた中川元延先生には木星の姿も見せていただきました。木星の縞模様や衛星の姿がはっきりと見え参加者一同本物の天体の姿に歓声を上げた次第です。月の観察で

は木星の大きさに比べてその大きさに驚きました。やっぱり月は近いんですね。クレーターまではっきりと見えます。室内で行われたバンドトランプスの歌と演奏もみなさんに楽しんでいただけたようです。お茶もお菓子もおいしかったし、とても良い秋の一夜でした。

### 年中行事とカレンダー 中川 元延

毎年12月になると、私は話題作りの主人公になる機会が多くなる。特に酒席では大もてである。

忘年会の時期、巷ではクリスマスの飾り付けを競い、住宅でも眩しいばかりである。なぜクリスマスではケーキを食べなければならないか？なぜローソクを灯すのか。ツリーのてっぺんの星はなに？なぜ12月25日にこだわるの？キッチンと説明できる人は少ないからだ。

同じ頃、早いところでは正月の門松が店の入口の両脇に置かれ始め、話題は正月行事へ進むことになる。再び疑問が湧き、お年玉は誰がなぜやる？なぜおもちを飾る？注連縄ってなん？門松の正しい切り口はどんな形？おせち料理の種類に意味はあるの？話しは尽きず深みに嵌る。

一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日、十一月十一日？などこよみを見ると目出度い日みたい？偶数の重なりはない？日曜はカレンダーの左？右？？

鯉のぼりとベーロン大会の関係をうまく説明すれば史実を知っていることになる。暦を知ると疑問が解消する。

私は星にとっても関心があるが、中でも七夕にはうるさい。真竹を用い、蓮の朝露で墨を摺るのは正式である。「朝露」の説明では、大人の前でしか話されない理由がある。小郡には日本広しと言えど、ここにしかない「棚機(七夕)神社」があり、正確に南北に流れる宝満川の畔に在る。ここの川面に牽牛が乗った船の七日月が浮かぶのを想像すると、「天の河」が目に見え浮かぶ。

年中行事とカレンダーは星と日と月と人間の営みの智慧が生み出した傑作集だ。

## 観月会に参加して

高良内町 西山 芳枝

わらべ唄に

♪お月さま えらいな

鏡のようになったり

櫛のようになったり

春、夏、秋、冬、一年中を照らす♪

子どもの頃より、月はいつも私達の身近にある存在です。9月26日、筑後川観月会に参加しました。会場に飾られた立派なすすきや萩の花、抹茶や和菓子のもてなしに、心が和みました。トラップスの方々の懐かしい歌や演奏も楽しかったです。また中川元延先生には望遠鏡で木星を観察させていただきました。木星のまわりに並ぶ四つの惑星がはっきり見えました。私には初めての経験で、とても印象に残りました。観月会でゆっくりした時間を過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。



月の観察をする子ども



トラップス

## 第373回例会

ネイチャーゲームと自然観察会

大木 武彦

秋のネイチャーゲームと自然観察会が10月18日(日)、さわやかな秋晴れのもと、高良山南側四季の森で行われました。大人、子供総勢14名で、登りは高良内幼稚園横の竹の子コースから、植物や昆虫などを観察しながら高良山森林公園を目指しました。途中の林にはシダ類、クス、シイ、カシ、クヌギ、コナラ、ヤマモモなどの木が多く見られ、道には多数のドングリ類が落ちていて秋を実感しました。樹間からの木漏れ日は、キラキラとダイヤモンドを散りばめたような自然からの贈り物でした。お昼はそれぞれ持参した弁当を快晴の森林公園でおいしく頂きました。

帰路は後谷コースをゆっくりとしたペースで秋の自然を満喫しながら下山しました。子供たちにはカマキリやカラスウリ、サワガニが取り分け人気のようなものでした。ネイチャーゲームでは大人も童心にかえり3種類を楽しみました。往路の「サウンドマップ」では、林道に腰掛けて二分間目を閉じます。その間に聴きつけた音とその方向を用紙の上に自分の絵で書きとめ、各々報告しました。小鳥の声、虫の声、木の実の落ちる音、カラスの鳴き声、梢を渡る風の音、木の葉のこすれる音など、それぞれの人が自分の感性や感受性を素直に表現しました。

お昼の「カモフラージュ」では、森林公園のつつじの一角に隠された10個の擬態や異物を幾つ発見できるかを競うものです。ありえない巨大なドングリや小さな恐竜、さりげなく置かれたボールペンなど、平均して6~7個見つけるのがやっとでした。

「宝さがし」は帰路の後谷コースで行いました。木の实、色づいた葉、においのするもの、落しものなど8つ宝物を探すものでした。イタチのふんなども見つけましたが、圧巻は甘い匂いのする黄色のカツラの葉で、全員が歓声とともにその匂い

に酔いしれました。最初に気づいた女の人の嗅覚にも感心しました。

この時期の昆虫等では次のものを見かけました。モンシロチョウ、キチョウ、クロヒカゲ、イチモンジセセリ、ルリタテハ、ウラギンシジミ、ヒメアカタテハ、ツマグロヒョウモン、アサギマダラ、オニヤンマ、シオカラトンボ、マユタテアカネ、ザトウムシ、カマキリ、ツユムシ、センチコガネ、ホソヘリカメムシ、ジョロウグモなどでした。ホソヘリカメムシが葉から飛び上がるや、瞬時にジョロウグモのネットに捕捉されたときは、数人がああっ！！と声をあげました。弱肉強食、食物連鎖の現実をまざまざと見た思いでした。

絶好の秋日和を大人も子供も、心地よい適度の疲労感で楽しんだネイチャーゲームと自然観察の一日でした。

### 秋の自然観察会とネイチャーゲーム

#### 野中町 石井 友加里

本日、子供と2人で参加しました。まず、親は高良山にハイキングなんて15年ぶりくらいの体験でした。楽しんでほど良い疲れで気分がそうかいです。

子供は自然の生き物植物にふれて楽しそうに満足です。そんな様子を見ていると、いかに自然が子供達に与える影響が大きいのか思い知りましたし、かけがえのない宝物だと実感しました。

大人はマイナスイオンやヒーリングミュージックなど人工から取得しようとするし、私もそうでしたが、大自然の中でのものが、作られた人工のものよりもだんぜん体に効くのだと体験しました。お金をかけなくても山に足を運ぶだけでこれだけ得る物があることを若い人にもっと知ってもらいたいですね。

#### 野中町 浅田 裕子

自分の身近な高良山に素敵な自然があるなんて感激しています。自然とふれあうことが今の私には楽しみです。



みんなで記念写真を撮りました

### 第374回例会

#### バードウィーク探鳥会 古賀 信夫

11月8日(日)高良山四季の森においてバードウォッチングウィーク探鳥会を行いました。参加者は子ども10人を含め34人でした。日本野鳥の会筑後支部の会員の方の指導のもと、山登りをしながら目を凝らし、耳をそばだて野鳥の姿や声を探しました。最後に鳥合わせを行いました。以外と沢山の種類の鳥がいたことに驚かされました。当日確認された鳥は以下のとおり

ハイタカ、キジバト、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、アオサギ、ソウシチョウ、ミサゴ  
24種

#### 垂見小学校3年 江口 真由

いろいろな鳥が見れて楽しかったです。



鳥の観察をする子ども

## 《行事案内》

## ◇ 第376回例会：

## 総会と講演会

総会終了後、講演会を行います。今回の講演会のテーマは「無添加石けんと地球環境」です。

〔日 時〕：1月24日(日) 13:30 受付

〔総会〕：14:00～15:00

〔講演会〕：15:10～16:00

〔講演会講師〕：林 眞一氏

(まるは油脂化学(株)社長)

〔会場〕：久留米大学御井学舎

メディアセンター1階

〔講演会参加費〕：無料

## ◇ 第377回例会：

## 高良山探鳥会

冬鳥の観察会と植物の冬芽の観察をします。

〔日 時〕：2月14日(日) 雨天中止

〔集合・解散〕：9:30・15:00 高良内幼稚園駐車場

〔参加費〕：100円

〔持ち物〕：弁当、水筒、帽子、筆記用具、あれば望遠鏡など。

〔共 催〕：日本野鳥の会筑後支部、久留米市農政部生産流通課

## ◇ 第378回例会：

## 筑後川春の野草を愉しむ会

筑後川の河川敷に生育する野草を観察し味わいます。野草で体内を浄化しましょう。たのしいイベントも用意されています。

〔日 時〕：3月28日(日) 小雨決行

〔集合・解散〕：9:30・15:00

〔場 所〕：くるめウス

〔参加費〕：400円

〔共 催〕：筑後川まるごと博物館運営委員会

## 久留米の自然

平成22年1月1日 第107号

発行 久留米の自然を守る会 発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0827 久留米市山本町豊田 2320-6

TEL 46-8622 FAX 46-8623 (古賀)

印刷 千年屋印刷

TEL 0942-43-2400 FAX 0942-43-2408

## 新年会のご案内

1月24日(日) 総会及び講演会終了後、新年会を行います。どなたでも参加できますので是非ご参加ください。

日 時：1月24日(日) 午後5時

場 所：「家庭料理 さつき」TEL0942-43-4727

参加費：3500円

※紙幅の都合により事務局だよりはお休みです。

「久留米の自然を守る会」ホームページもご覧ください。<http://kurumenushizen.net>

## 1. 会員異動

入会 宮崎和子(久留米市)

退会 笠 陽子 今村由子 行徳直久

尾花三郎(久留米市)

## 2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

## 3. 原稿募集

次号108号は平成22年4月1日発行予定です。原稿の〆切は3月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

## 4. 幹事会兼事務局会議のご案内

幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00～21:00まで、山川コミュニティセンターで行います。皆さんも気軽にご参加下さい。

(1月13日、2月3日、3月3日、4月7日)

## 書籍のご案内

当会で発行しております下記の文献についてはまだまだ在庫がありますので是非知人友人の方に紹介してください。

## ◎ ひとつの川から見えるのもの

A4版 約350ページオールカラー

定価 2000円 在庫 230冊

## ◎ 動物笑話

新書版 約120ページ

非売品ですが御希望の方には500円でお分けいたします。 在庫 91冊